

# 幼児における自称詞の使用

—心的用語の使用および自分と他者についての属性記述内容との関連—

長田 瑞恵<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>十文字学園女子大学)

キーワード: 幼児 自称詞 心的用語

Preschool children's use of the first personal pronoun

Mizue NAGATA<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>Jumonji University)

Key words: Preschool children, Personal pronoun, Mental terms

## 目的

自分の呼称（以後「自称詞」と呼ぶ）は自我の発達を表すものの一つであり、他者との区別において自我と関連して獲得されはじめると考えられる（西川，2003）。一方、欲求、感情、思考などを表す心的用語を用いて、自分自身だけでなく、他者についても言及できるようになるためには、自己と他者の区別が付き、他者とは異なるものとしての自我の発達が必要であると考えられる。このように、自称詞の使用においても、心的用語の使用においても、ともに自我の発達に関連していると予想されるため、自称詞使用と心的用語使用とは同時期に発達が進むと考えられる。そこで、本研究では、自称詞の使用と心的用語の使用との関連を検討する。

## 方法

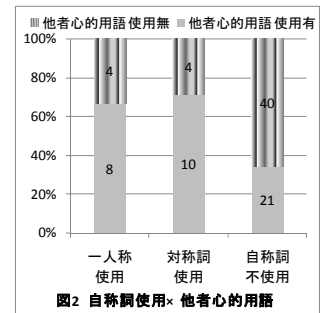
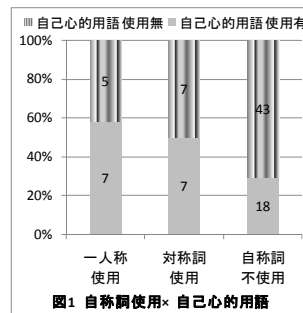
**\*被験者** 埼玉県・東京都の私立保育園の3歳児クラス28名（m=4;0, 男17・女11）、4歳児クラス29名（m=5;0, 男10・女19）、5歳児クラス30名（m=6;1, 男18・女12）。

**\*材料と手続** 1. **自己記述課題** ラポール形成後、自分自身について人物像を語ってもらった。「○○ちゃん（被験者）はどんな子かな?」「○○ちゃんは自分のどんなところが好き?」「○○ちゃんの自分のいいところはどこかな?」2. **他者記述課題** 保育園で一番仲の良い友達の名前を尋ねた後、その友達の人物像を語ってもらった。「▲▲ちゃん（友達）はどんな子かな?」「○○ちゃんは▲▲ちゃんのどんなところが好き?」「▲▲ちゃんのいいところはどこかな?」両課題とも、適宜、「他には?」「どうして?」などと回答を促した。被験者と実験者の会話は録音し、逐語的に文字化して分析に使用した。

## 結果

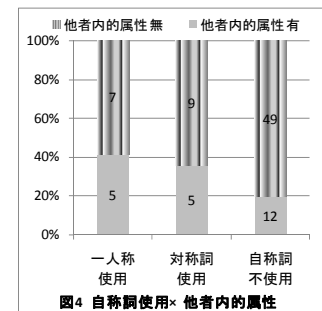
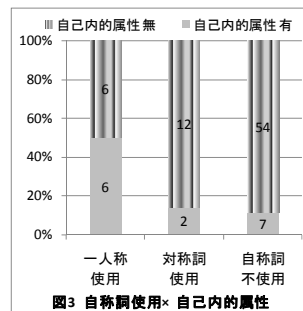
### 1. 自称詞使用と心的用語使用

2つの記述課題において1回でも一人称代名詞を使用した子どもを「一人称使用」、対称詞のみを使用した子どもを「対称詞使用」、自称詞を全く使用しなかった子どもを「自称詞不使用」と分類した。また、各課題の中で心的用語を使用したか否かで、自己心的用語有・無、他者心的用語有・無に被験者を分類した。予備分析の結果、自称詞使用、自己心的用語有無、他者心的用語有無のいずれも学年による人数の偏りは示されなかった。自称詞使用と心的用語使用に違いがあるか否かを検討するために、自称詞使用(3)×自己心的用語有無(2)、自称詞使用(3)×他者心的用語有無(2)の $\chi^2$ 検定を行った。その結果、自己心的用語有無では人数の偏りが有意傾向であり( $\chi^2(2)=4.83$ ,  $p<.10$ : 図1)、残差分析の結果、自称詞不使用では、自己心的用語有が期待値より有意に少なく、自己心的用語無が期待値より有意に多い傾向があった。さらに、他者心的用語有無について人数の偏りが有意であった( $\chi^2(2)=8.98$ ,  $p<.01$ : 図2)。残差分析の結果、自称詞不使用では他者心的用語有が期待値より有意に少なく他者心的用語無が有意に多い一方で、対称詞使用では他者心的用語有が期待値より有意に多く他者心的用語無が有意に少なかった。



### 2. 自称詞使用と記述された人物の内的心的属性

2つの記述課題において内的心的属性に言及したか否かで自己内的属性有・無、他者内的属性有・無に被験者を分類した。予備分析の結果、自己内的属性有無、他者内的属性有無のいずれも学年による人数の偏りは示されなかった。自称詞使用と人物の内的心的属性の記述が関連するか検討するために、自称詞使用(3)×自己内的属性有無(2)、自称詞使用(3)×他者内的属性有無(2)の $\chi^2$ 検定を行った。その結果、自己内的属性有無( $\chi^2(2)=10.53$ ,  $p<.01$ : 図3)について人数の偏りが有意であった。残差分析の結果、自称詞不使用では内的属性有が期待値より有意に少なく内的属性無が有意に多い一方で、一人称使用では、内的属性有が期待値より有意に多く内的属性無が有意に少なかった。他者内的属性有無については人数の偏りは有意ではなかった( $\chi^2(2)=3.52$ , n.s.: 図4)。



## 考察

自称詞不使用では心的用語の使用が少なかったことから、自称詞使用と心的用語使用とは関連することが示された。この結果は、自称詞と心的用語を使用する能力とが共に、他者との区別において発達する自我との発達と関連することを示唆していると考えられる。一方、自称詞の使用は自分自身の内的心的属性を語る能力とも関連することが示されたが、他者の内的心的属性を語る能力とは関連が示されなかった。

## 引用文献

西川由紀子. (2003) 子どもの自称詞の使い分け: 「オレ」という自称詞に着目して. 発達心理学研究, 14 (1), 25-38.  
\*本研究の実施にあたって、平成21年度科学研究費(若手研究(B) 課題番号21730597)の助成を受けた。